



研究ノート：特集——記憶を育む／記憶と向き合う：子どものことばの実践を捉え直す

ジュンパ・ラヒリのことばと記憶

『翻訳する私』をめぐって

川上 郁雄 *

要旨

ベンガル人の両親のもとロンドンで生まれアメリカで成長した作家ジュンパ・ラヒリはエッセイ集『翻訳する私』（2022/2025）で独自の「翻訳論」を展開した。本稿では幼少期から複数言語環境で成長する子どもの言語習得と成長を捉える視点を認知科学の知見をもとに設定した。その視点からラヒリの「翻訳論」を読み解くと、ラヒリの幼少期からの移動と複数言語に関する経験と記憶が、彼女の「翻訳論」と生き方に強く影響している可能性があることがわかった。最後に、この「翻訳論」に含まれる論点が「移動する子ども」学の主題につながることを指摘した。

キーワード

- ジュンパ・ラヒリ,
- 翻訳論,
- 言語習得,
- 複数言語環境,
- 移動とことばの記憶

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

ジュンパ・ラヒリ（Jhumpa Lahiri）は1999年に発表した短編小説「病気の通訳」でいきなりO. ヘンリー賞を受賞し、鮮烈なデビューを果たした。この作品はアメリカ生まれの若いインド人夫婦が二人の子どもを連れてインドを観光する物語で、ガイドをする地元のタクシー運転手の男が夫婦と子どもたちを近郊にある太陽神の寺院に案内する設定になっている。もう一つの短編小説「停電の夜に」に登場するのはインド系アメリカ人の若い男女で、二人ともインド移民二世で、アメリカで成長した設定になっている。これらの作品を含む最初の短編集『停電の夜に』で、ラヒリはPEN／ヘミングウェイ賞、ニューヨーカー新人賞などを受賞し、作家としての地位を固めた。

* 早稲田大学名誉教授（Eメール：kawakami@waseda.jp）

彼女はインド・東部出身の両親のもと1967年にロンドンで生まれた。ラヒリの両親はインド東部の「カルカッタ」¹出身で、ベンガル語話者であった。それゆえ、家庭ではベンガル語が話された。ラヒリは幼少期に両親とともに英国を出て渡米し²、米国北部のニューイングランド地方で成長した。英語で教育を受け、のちにコロンビア大学、ボストン大学大学院で修士号3つと博士号を取得した。

ラヒリはインドに住んだことはないが、子どもの頃、かなり長い間インドの西ベンガル州コルカタ（カルカッタ）に滞在したことがあったという。「両親の故郷であるカルカッタへ行くと、一応は部外者でありながら、さりとて単なる旅行者でもなかった。（中略）いわば完全に内部でも外部でもない周縁的な位置からカルカッタを見たことに、あとで作家となる原点があった」（小川, 2000, p. 264）と語る³。

2003年に長編小説『その名にちなんで』を発表、2008年の作品『見知らぬ場所』でフランク・オコナー国際短編賞を受賞し、2013年に長編小説『低地』を発表した。その後、イタリア・ローマに移住、イタリア語で創作活動を行う。イタリア語のエッセイや短編小説をまとめ、2015年に『べつの言葉で』、2018年に『わたしのいるところ』、2021年に『思い出すこと』を発表した。そして、2022年に英語のエッセイ集『翻訳する私』を発表した。

このような作品群を持つラヒリは作家として活動するとともに、近年はアメリカのプリンストン大学、コロンビア大学で「文芸論」や「翻訳論」等の教鞭を執る。

ラヒリの作品にはラヒリの家族や自身の経験をベースに、アメリカに住むインド系アメリカ人移民一世や移民二世、両親の祖国インドに住む人々の生活などがよく登場する。これらの作風や彼女の移民背景から「インド系アメリカ人作家」と呼ばれることが多い。

これまでラヒリの文学作品は世界各地で多くの人々を魅了し、高く評価され、また詳しく研究されてきた。例えば、小川（2001）、ライダ（2009）、Munos（2013）、Arima（2015）、Chatterjee

1 「カルカッタ」とは、この地方のベンガル語の名称コルカタが英国植民地時代に英語表記されたためであった。2001年以後、西ベンガル州の州都として、ベンガル語の名称コルカタが使用されている。コルカタの人口は、現在、1,400万人を超え、インド第3位の都市となっている。西ベンガル州の公用語はベンガル語で、以前よりベンガル語を話す人はベンガル人と言われた。

2 家族が渡米を決めた時期、コルカタでは極左組織が当局と武装闘争を繰り返し、不穏な社会状況があった。その様子が『低地』（ラヒリ, 2013/2014）に描かれている。

3 初期の長編小説『その名にちなんで』（ラヒリ, 2003/2004）にインドに滞在するアメリカ生まれの子どもの視点で現地の様子が詳細に描かれている。

(2022), 志賀俊介の研究⁴などがある。これらの研究ではラヒリの諸作品の主題や文学としての意味についてよく議論されている。その論点は作品に登場するアメリカのインド移民やインド系アメリカ人二世の心情, アメリカにもインドにも所属しない根無し草／ディアスポラ的存在の意味合い, そのアイデンティティに見られる心理的不安やトラウマ等, さらにはアメリカ社会の深淵にある共通性と多様性やアメリカ文学史における作品群の位置付けや意義まで幅広く論じられている。

これらの研究に共通するのは, ラヒリの作品にはラヒリ自身の生い立ちや移民の経験, アメリカでの生活などが影響していると論じられる点である。しかし, ラヒリがなぜそのような主題を描くことに関心を持つのか, その創造力や創作意欲はどこから生まれてくるのか, あるいは彼女の幼少期からの経験や成長過程は彼女の創作活動とどのように関連にするのかなどは十分に議論されていない。つまり, これらの研究は彼女が「ハイフンつき子ども (hyphenated children)」⁵の一人だからこそ, このような作品が生まれたのだと説明しているように見える。

私は文学研究者ではないし, ラヒリの作品を文学的研究視点から論じることを目指してはいない。一方, 私は以前より, ラヒリの作品や創作活動に彼女の幼少期から複数言語環境で成長した経験と記憶が深く関わっていると考えてきた。ラヒリは英国, 米国, インドの間で幼少期から移住や移動, 家庭内や移動先でのベンガル語, 英語の間の不断の言語間移動を経験していた。

彼女が最初に注目され数々の賞を受賞した短編集の邦題は『停電の夜に』(ラヒリ, 1999/2000) だが, 原題は *Interpreter of Maladies* (病気の通訳) である。そして, 2022年に刊行されたエッセイ集の邦題は『翻訳する私』で, 原題は *Translating myself and others* である。ラヒリはなぜ interpreter や translating myself をこれらの作品のタイトルに含めたのか。また, それは移動と複数言語環境で成長した彼女の経験と記憶とどのように関係するのだろうか。本研究は, このように幼少期から複数言語環境で生きる経験と記憶が文学作品を創出することとどのように関連しているのかを, ジュンパ・ラヒリの作品を読み解くことによって考える試みである。

4 志賀俊介は2020年にJ.ラヒリ研究をまとめた博士論文 *Living in the middle of nowhere: Ontological ambivalence in Jhumpa Lahiri's works* (脱領域の文学——ジュンパ・ラヒリの作品における存在論的二律背反) を慶應義塾大学に提出し博士号を授与された。その論文は非公開のため未見であるが, その審査要旨が公開されている。URL: https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO10001002-20195083-0002

5 hyphenated children は, Japanese-American (日系アメリカ人) のように, 複数の文化的・民族的背景をもつ子どもをいう。アイデンティティ, 帰属意識, 忠誠心, 複数言語などに多重性・複数性があることを葛藤や混乱と否定的に, 逆に柔軟性や多様性と肯定的に捉える見方がある。

以下、はじめに幼少期の子どもの言語習得についての認知科学の知見をもとに、まず単数言語環境で成長する子どもの場合の言語習得と認知能力の発達について考える。それと比較する形で、幼少期に移動と複数言語環境で成長する子どもの言語習得と認知能力がどのように発達するのかを考える。そこから、ラヒリの作品を読み解くための視点を設定する。次にラヒリの『翻訳する私』(2022/2025)の内容と、彼女の幼少期からの移動とことばの記憶がどのように関連するのかを読み解く。最後に、設定した観点からラヒリの創作活動の背景に彼女の幼少期からの移動とことばの記憶が深く関わっていることを論じる、という順序で進める。

2. ジュンパ・ラヒリの作品を読み解くための視点

ラヒリはベンガル語を母語とする両親のもとロンドンで生まれ、2歳の時にアメリカへ移住した。当時の彼女がベンガル語や英語の異なる音に接し、それらの刺激に脳や身体がどう反応し、その中からどのように言語習得をしていったのか。また、ベンガル語や英語をどれほど理解し、どんな言葉を発し、他者とどのようなコミュニケーションをとっていたのか、そのことが幼少期のラヒリの心や生き方にどのように影響したのか。また、子どもの頃かなり長い間インド・コルカタに滞在した経験があるというラヒリがその時どのような言語体験を積んだのかも、記録はなく、正確にはわからない。

ただし、幼少期の言語環境や言語使用経験は子どもの言語習得だけではなく認知発達において極めて重要であることは近年の認知科学で指摘されている⁶。ラヒリと彼女の作品を理解するうえでも、彼女の幼少期の移動とことばを考えることが必要不可欠であろう。

そこで、一般に、単数言語環境で生まれた子どもが音や刺激にどのように反応し、脳や身体がどのように発達し、どのように言語(記号システムと意味の体系)を習得していくのか、また他者とどのようにコミュニケーションをとっていくのか、それらの経験と記憶は子どもの想像力や創造力の発達にどう関連するのかについて、これまでの認知科学や発達心理学の知見を参考に考えてみたい⁷。そこからラヒリのように、複数言語環境で成長した子どもの言語習得と認知能力の発達、そして経験と記憶を理解する視点を設定する。

6 川上(2023, 2024)参照。

7 ここで参考にしたのは、今井(2010, 2013, 2020)、今井、佐治(2014, 2023)、今井、針生(2014)、今井、秋田(2023)、米盛(2024)等である。

2. 1. 子どもの言語習得と「記号接地問題」

言語は巨大で複雑な「記号システム」である。生まれたての子どもはその巨大で複雑な「記号システム」をどのように認識し、習得していくのかについて、これまで多くの研究が行われてきた。

子どもは胎児のときから多様な音を聞いている。その音は脳を刺激し、生後の認知活動を支える脳の発達を促している。誕生後は音（聴覚的刺激）だけではなく、視覚的・触覚的刺激など、多様な身体的刺激から多くの情報を受けとりながら成長していく。

乳児は、生後2ヶ月目ごろになると「社会的微笑」とも呼ばれる表情を見せ喜びを他者（養育者）に向けて発するようになるが、これは他者を社会的な意味で認識する基盤が生まれていることを示す。さらに10ヶ月目ごろには指差し（pointing）で何かを要求したり、ある対象物への興味を他者（養育者）と共有したりすることができるようになる。

乳児の指差しは、発語する前の「記号」として成立し、その後の音声言語による記号コミュニケーションの強力な足場を作る。指差しで表現された対象物が数ヶ月後には言語で表現されるようになる。「一語期」から「二語文の出現時期」へ移行していく過程で、指差しと対象物が一致する例（帽子を「ぼうし」と言う）と、指差しと対象物が一致しない例（帽子を指して「おとうさん」と言う）がある。この場合、後者の例が早く出てくる子どもは二語文の出現時期も早いことがわかっていく。

乳児の段階でも子どもの脳と身体の中にしっかりした認知活動が起こっている。形の似ているものを同じカテゴリーのものとしてまとめたり（形バイアス）、特定の事物や動作から生まれる概念を、別の事物や動作にその概念の類似性（アイコン性）を見たりする（対称性バイアス）などの認知活動が見られる。子どもは外部から入る音を切り分けるなど、言語情報を自分で分析し、言語の要素を発見し、再構築することによって言語を習得していく。例えば、日本語を母語とする子どもの場合、大きな犬も小さい犬も「ワンワン」と呼ばれること⁸を繰り返す中で、子どもの中に具体性と抽象性、個別性と共通性を認識しようとする動きが生まれる。

もちろん、乳児の身体も脳も小さい発達段階においてその情報処理能力は大人に比べて小さいが、それは逆に情報処理能力を効率化して発達することを促す。例えば、日本語を母語とする子どもの場合、1歳を過ぎると、日本語の音声に含まれない[r][l]を聞き分ける力が落ちていくが、日本語の聞き分けに[r][l]音が役立たないために効率化して発達するためと考えられる。言語

8 「換喩」（メトニミー）の一例。

習得は脳や身体の発達と連動する形で言語が身体の一部となっていくプロセスである。

このように、子どもの言語習得は、身体的・知覚的経験によって感覚、知覚、感情などが結びつけられていく中で、記号システムが自分の身体に取り込まれる「記号接地」⁹の体験と言える。

2. 2. 意味と記憶

乳児は音の塊の中から単語を構成する音素のカテゴリーを自分で発見し、単語を切り出すための手がかりを探していくと同時に、単語の意味も推論していかなければならない。語彙の意味推論と習得は脳の活動と発達に密接に関係している¹⁰。

子どもは1歳の誕生日を迎える頃から、本格的に単語の意味の学習を始め、2歳近くになると語彙が急速に増え、文の意味の理解ができるようになる。ことばの意味を理解するということは、そのことばの指し示す対象だけではなく、使える範囲がわかるということを用いる。では、この時、子どもの脳で何が起きているのか。

子どもは知らない語を聞くと、その意味を推論する¹¹。これらの推論はいつもうまくいく訳ではない。学習した知識を過剰に一般化することもある。例えば、「ピッチャー、キャッチャー、バッチャー」。このような「だいたいこういう意味」というレベル（即時マッピング）で意味が近いことばのクラスターをつくり、概念領域の枠を作る。単語どうしの意味関係の更新を繰り返し、単語の意味の境界も同時に変え、自分なりの語彙体系を構築していく。帰納推論とアブダクション推論は、必ず正解が得られる推論ではないが、だからこそ「新たな知識を創造する」推論として重要である（今井、秋田, 2023, p. 217）。

これらの推論によって語彙の学習が飛躍的に加速し、言語の習得が進む¹²。語彙の概念領域

9 S. ハルナッドは記号の意味を記号のみで理解することはできない、また意味はどこかで人の感覚と接地していなければならないと主張した（Harnad, 1990）。

10 語彙習得には脳内で意味を軸にした部分（左頭頂葉）と音を軸にした部分（左頭頂葉）が関与することや、動詞を聞くと、その行動を実際に行っているときに活動する脳内の部位が活動することもわかっている。

11 この推論には「相互排他の推論」「アナロジーの推論」「帰納推論」「アブダクション推論」などがある。詳しくは今井、秋田（2023）参照。

12 推論によって語彙の学習が飛躍的に進む過程は「ブートストラッピング・サイクル」といわれる。またその過程で「ブートストラッピング・サイクルによって、感覚・知覚レベルに留まる類似性ではなく、背後にある関係の類似性を見抜き、抽象的な概念を習得したり、目では観察できない因果関係を理解したりできるようになっていく。ここで大事な役割を果たすのがことばだ。」（今井、秋田, 2023, p. 247）と言われる。

は知覚的に安定したものから、より抽象的なものへ段階的に発見されていく。ここにおいても、脳の発達と言語能力、運動制御の能力とあいまって言語が身体に埋め込まれて発達していく。

ただし、これらの認知活動は子どもがいつも一人で行うわけではない。子どもの言語習得には他者（養育者）からの働きかけややりとりが重要な意味をなす。指差しを介して子どもと養育者が同じものを見ること（共同注意場面）からお互いが足場にできるコミュニケーションの共有基盤がつくられ、感情や態度など非言語的、普遍的な共感や社会的規範も含み、言語習得が進んでいく。養育者が発話に組み込む（コード）情報を子どもが読み解く（デコード）という原初的な記号コミュニケーションを体験する。その体験は大人やコミュニティが世界を切り分ける方法を体得する体験でもある。

ここで重要な働きをなすのが、ことばと記憶である。他者からの働きかけややりとりは子どもの発達に合わせて調整されたことばによって行われる。子どもの体験した出来事の記憶はいつ・どこ・だれなどの時間的、空間的な情報が含まれるエピソード記憶として貯蔵される。その体験の繰り返しにより、エピソード記憶は文脈的情報が消失した意味記憶となる。エピソード記憶と意味記憶は密接に関係するが、意味記憶は固定した記憶の総体ではなく、エピソード記憶によって常に更新されていく動的なものである。こうして、子どもの中に言語習得が進み、意味のネットワークが構築されていく。

つまり、子どもは胎児の時期も含め、身体を経て得られる感覚、知覚、運動、感情などの情報を受け、脳内ネットワークを拡大していく。その中で語彙の習得、意味領域と記憶を更新し、具体的／イメージ的思考から身体性を離れた抽象的思考へと情報処理能力を高めていく。そして、自律的にことばの力と考える力を鍛え、同時に想像力、創造力を発達させていく。

2. 3. 複数言語環境における言語習得

近年、「言語は身体につながっている」、「言語は身体的である」という視点が広く認められるようになった。しかし、複数言語環境で複数言語に触れながら成長する子どもの言語習得については、今井、佐治（2023）が指摘するように、「複数言語の習得のメカニズムや、複数言語を学習することによる思考力への影響、学力への影響などの研究」は認知科学においてもまだ十分に行われていない。

ここでは、複数言語環境で成長したラヒリの作品を読み解く視座設定の試みとして、前述の認知科学、発達心理学等の知見を踏まえて、複数言語に触れながら成長する子どもがどのように言

語を認識し習得していくのか、またどのように成長していくのかについて考える視点を子どもの立場から考えてみる。

①音の切り出し

子どもは音の塊から言語の単語を構成する音素のカテゴリーを発見し、自分なりのカテゴリーを作り、さらにその言語で単語を切り出すための手がかり（単語の語頭や語尾に来やすい音素や、1つの単語の中に起こりにくい音素は何かなど）も自分で探さなければならない。その営みは単数言語環境の子どもも複数言語環境の子どもも同様であるが、後者の子どもの場合、異なる複数言語に対応しなければならないという意味で負担がかかる。例えば、英語圏で暮らす日本語を母語とする子どもが「ごはん」を「gofan」と発音するのはその一例である。子どもが音を認識し自分で分析して発見する過程で、単語の意味の推論をしていくための手がかりを自分で発見し、さらに情報処理システムを自分の中に作っていく。

②意味の境界の探索

子どもは音の切り出しとともに、単語の意味も自分で考えなければならない。その営みも単数言語環境の子どもも複数言語環境の子どもも同様である。ただし、後者の場合、意味の境界を複数言語間で行わなければならない。例えば、「緑」と「青」を区別する言語もあれば区別しない言語もある。色の名前が二つしかない言語、10以上の色の名前を持つ言語などもある（今井, 2010）。動詞の意味の範囲は言語によっても異なる。「モノを持つ」動作を表す動詞は日本語の場合「持つ」「担ぐ」「抱える」「抱く」「載せる」などの動詞で言い分けるが、中国語の場合、身体の中のどの部分で言い分けるか、どのような形の手で支えるかなどによって20以上の動詞で言い分ける（今井, 佐治, 2014）。つまり、後者の子どもの言語習得において、子どもは異なる言語それぞれの「言語固有の境界」を把握し、自分なりの記号システムの構築をしなければならないことを意味する。

複数言語環境で成長する子どもの場合、言語習得過程で複数言語の間を行き来し、常にそれぞれの「言語固有の意味の境界」を自分で発見し、かつ更新していかなければならない。それはA言語もB言語もそれぞれの全体像を把握する前に同じ意味を別の音で理解する作業であり、常に「翻訳作業」ともなうような動きであろう。ただし、その作業は主体的で動的で、創造的営みとも言える。

③記憶

子どもが音の切り出しから単語の意味を自分で考えるエンジンは推論である。帰納推論、アブ

ダクション推論は自然な思考で、生存に欠かせない創造的推論とも言われる（今井，秋田，2023，p. 246）。単語の意味は他者や文脈とともに記憶され（エピソード記憶），具体的／イメージ的思考から身体性を離れた抽象的思考（意味記憶）へと情報処理能力を高めていく。言語習得における「語の概念化」は思考を飛躍的に高める。語の記憶は記号システムの構築に不可欠な要素なのである。したがって言語習得における記憶も身体に「記号接地」していく。ただし，その記憶は動的に変化し，更新されていく。それゆえに，創造的推論から子どもの想像力や創造力が刺激され，発達していく。

④脳－身体－環境の動的関係性と，移動とことば

脳－身体－環境の間の動的な相互作用の中で，子どもは多様な刺激を受け，身体的変化を生じつつ成長していく。複数言語環境で成長する子どもの場合，複数言語から受ける刺激による身体的変化が子どもの「適応的行動」に影響を与え，かつ言語習得に深く関わっていく。その過程で，子どもは複数の記号システムに関わりながら，その記号システムを洗練していく。それは，複数言語で考える力，移動の中の生活世界を読み解く力，さらに変化する環境に対応する力が鍛えられていく。その結果，脳の動きが活発化し，「感覚・知覚・推論・記憶」が更新されるとともに，環境変化によって子どもの脳と身体の中で複数言語の知識と習得が同時に進んでいく。

さて，ラヒリは2012年よりアメリカからイタリアへ家族とともに移住し，イタリア語で生活するとともにイタリア語で創作活動を行った。ロンドンで生まれ，アメリカ，インドそしてイタリアへ空間を移動したラヒリは，ベンガル語，英語，イタリア語の音の世界を移動してきた。

前述の認知科学から想定される，幼少期より複数言語環境で言語習得や認知発達を経験したラヒリの視点から考えると，彼女をアメリカ文学史に位置付けようとしたり，アメリカや世界各地の「ディアスポラ文学」や「ディアスポラ・アイデンティティ」¹³の議論になぞらえたりする論者たちを尻目に，ラヒリはまるでそのような他者からの「名付け」¹⁴に抗するかのように生きてきたように見える。では，ラヒリは，どのように世界を生きてきたのか。この「ラヒリの世界」を上記の4つの視点から，彼女の最新エッセイ集『翻訳する私』（2025）を紐解きながら，考えてみたいと思う。

13 Chatterjee (2022) は「インド系アメリカ人ディアスポラ」(Indian American Diaspora) を，ラヒリを読み解く鍵概念として論じている。

14 『その名にちなんで』（ラヒリ，2003/2004）はアメリカで生まれた移民二世の主人公ゴゴリ・ガングリーの名前にまつわる様々な問題が描かれている。

3. ジュンパ・ラヒリの『翻訳する私』

『翻訳する私』(2022/2025, 以下本書)は、ラヒリが2015年から2021年の間に発表した講演や雑誌投稿などの原稿を10本、収録したエッセイ集である。これらのエッセイは身辺雑記ではない。ラヒリが英語やイタリア語で書いた創作活動や翻訳活動の中で、自身のことや翻訳について深く考えた内容が綴られている。ここでは、本書の内容と、彼女の幼少期からの移動とことばの記憶がどのように関連するのかを読み解いていく。

以下、本書におけるラヒリの思考の軌跡を追ってみよう。

3. 1. ラヒリの幼少期の記憶, そして翻訳論

ラヒリは、本書の「序文」の冒頭で「翻訳のジレンマという記憶が、幼児期にまでさかのぼる。」と述べ、次のようなエピソードを記している。

五歳だった私は幼稚園の教室で、ほかの子と大きなテーブルを囲み、母の日のカードを作っていた。まず白い厚紙を折ってから、クレープ紙でピンクのバラと緑の枝を工作して、表側に貼りつける。保育助手の先生がテーブルを回りながら、バラの花に香りのスプレーをしてくれた。折ったカードの内側には、「大好きなママ、母の日おめでとう」というメッセージを手書きする。ここで私はつまづいた。母は「ママ」ではなくて、「マー」なのだ。私にとっての母はベンガル語の「マー」であり、母もそう呼ばれて返事をした。その言葉を使ってしまうてよいものか。さりとて英語で間に合わせたくもない。「ママ」では外国語っぽくて、母を遠ざけてしまいそうだし、母だっていやだろう。(ラヒリ, 2025, p. 9)

ラヒリがいう「翻訳のジレンマの記憶」というのはこのような幼少期の経験にもとづく。この記憶は今でも心に残る生々しい記憶であるという。

あのジレンマを思い返すと、翻訳のみならず自分の文章を書く場合でも、ほとんど事情は変わらないような気がする。二つの言語で育った私は、その一つたる英語で作文ができるようになった段階から、翻訳とは人生の中心にあって複雑な役割を果たすものであることを、すでに直感していた。また中心にあって複雑と言えば、私の作家人生において母が果たすことになった役割もそうだった。母は題材にもインスピレーションにもなってくれた。(ラヒリ, 2025, pp. 9-10)

という。

ラヒリは小説を書き出したころから、思っていたことがあった。例えば、「「二つに割れた言語世界」に生まれたという自意識」、「私の頭の中にはベンガル語を話す人たちがいて、その物語を私が英語で書くとしたら、やむを得ない虚構として英語をしゃべる人間にすり替えている」。その上で、「私は物心ついてからずっと翻訳について考えて生きてきた人間だと言いたい」（ラヒリ, 2025, p. 10）と述べ、本書が彼女独自の「翻訳論」であることを強調する。

ラヒリは大学院時代にベンガル語の作家の短編を英語に訳すことがあったが、その際、彼女の母にこの短編を朗読してもらい、その録音をもとに作業を進めたという。そのような方法をとった理由としてラヒリは、「私はベンガル語を話したり聞いたりすることはできるが、文字からの解釈にはやや難がある」（ラヒリ, 2025, p. 10）と説明する。

さらに、ラヒリはこのような翻訳作業を実は幼少期から経験しているという。

私は、もっと昔から、およそ読むことができるようになる以前から、翻訳をしていたと言えるのだ。暮らしの中には、英語とベンガル語が同時に存在した。それを自分のために、人のために、いつも相互に通じさせようとしていた。（ラヒリ, 2025, p. 11）

そのため作家になってからもラヒリは自分と同じような境遇の作家に親近感を持っている。

いまの私は、異なる言語の狭間に生きて、読んで、考えて、書いていた作家の系譜に引き寄せられる。（ラヒリ, 2025, p. 13）

この「序文」で、ラヒリは「私はずっと昔から翻訳をしていたのだと再認識する意味」があったと述べ、

書く、訳す、という二つは行為の両面、一つのコインの裏表だ。あるいは二つのストロークだろうか。二つに分かれていながら、力を合わせるストロークとなって、もっと遠く、もっと深く、この不思議な言語世界を泳いでいける。（ラヒリ, 2025, pp. 16-17）

と綴る。

3. 2. なぜイタリア語なのか、そして翻訳論

ラヒリは2012年にローマに移住し、イタリア語の学習とイタリア語による作家活動を本格化する。周りから「なぜイタリア語なのか」と質問されることが多くあったという。そこから自身も自

問するようになり、イタリア語で書いたエッセイ『べつの言葉で』¹⁵を発表した。その中で、「私は本当の意味で母語がない」、「言語的には孤児である感覚、とも言えるだろう」と述べている。

ラヒリがイタリア語を学びながら思ったのは、「外国語をマスターするとしたら、二つの大きなドアを開けなくてはならない。まず「わかる」こと。それから「話す」こと。」そして三番目の大きなドア、最大の難関が「書く」と考えるラヒリは45歳からイタリア語で考えて書こうとした。その経験から次のようにいう。

身についた英語と、これからのドアとの間で、どっちつかずに浮いたようになる。そして私の場合には、英語とイタリア語のどちらにも距離があることを、まず認めなければならない。(中略)ほかの言語で書こうとしていると、つらい思いをした過去がよみがえる。二つの世界の間。どっちからも外側の、孤独感、疎外感。(ラヒリ, 2025, pp. 23-24)

ラヒリは、ここで、「接ぎ木」というメタファーを提示する。「接ぎ木」とは園芸の用語で、品種改良や成長過程の弱点を修正するために行われることをいうが、ラヒリは自分の人生は接ぎ木で、それを繰り返すように生きてきたとして、次のように述べる。

移民の子どもだった私は、そもそも接ぎ木から生じた結果である。地理的にも文化的にも危なっかしく接がれた。そして作家になってからずっと、このテーマ、経験、トラウマをめぐって書いてきた。私が世界を読めば、そのようになる。接ぎ木を考えると、私のことがよくわかる。イタリア語で書くようになった現在では、もう接ぎ木そのものだ。(ラヒリ, 2025, p. 30)

ラヒリはローマに移住する前からイタリアの作家たちの作品を原語で読んでいた。その作家たちの中でも、ドメニコ・スタルノーネ(1943年ナポリ生まれ)の作品に惹かれていた。当初は彼の作品を英訳することは考えていなかったようだが、2017年に『靴ひも』を、2018年に『トリック』をイタリア語から翻訳した。それぞれの英語版に「訳者序文」を寄せている。

本書にはその「訳者序文」が2本、収録されている。それらを読むと、それぞれの作品の解説だけではなく、ラヒリが翻訳について考えたことや、翻訳中に考えたことが随所に出てくる。

例えば、イタリア語の作品を原語で読むことで、ラヒリは「新しい自己認識」を得ようとしていたという。ラヒリはいう。

15 イタリア語の原題は *In alter parole* (2015)。のちに英語翻訳本 *In other words* (2016) が刊行された。

それまで私の表看板になっていた言語（英語）と国（アメリカ）から離脱して、喜んで亡命生活を送っていた。ところが『靴ひも』を読んだら、その衝撃に圧倒されて、いつか訳したいと思うようになった。私が強く共感した人物はアルドである。私も逃げた人間だったからだ。私の場合はイタリアへ逃げた。イタリア語を逃げ場に、自由と幸福を求めて、それを見つけた。（ラヒリ, 2025, p. 39）

もう一つのスタルノーネの作品『トリック』については、ラヒリは次のように評する。

テーマとしても言語としても、結合、借用、接ぎ木、という意図があって制作されたものである。（ラヒリ, 2025, p. 50）

さらに、

親に、子供に、自分の決断に、出自に怒りがある。また不安から逃れることもできない。自分はどんな人間なのか不安である。見えるものにも見えないものにも不安がある。（ラヒリ, 2025, p. 54）

と述べる。

作者であるスタルノーネにとって

アイデンティティとは一筋縄で行くものではない。とどまることなく常に流動する。選別、分類、偶然、戦略、危険がつきまとう。（ラヒリ, 2025, p. 53）

とラヒリは解釈している。

その上で、「翻訳は原文への外科手術であって、外国語のDNAにこだわりつつ、別系統の文法・構文の移植を必須とする。」「翻訳は複製と転換の行為である」（ラヒリ, 2025, p. 57）と、アイデンティティの流動性と翻訳行為の本質について考察を深めている。

3. 3. オウィディウスの『変身物語』と翻訳論

ラヒリはプリンストン大学の同僚とオウィディウスの『変身物語』¹⁶を共同で英訳することになった。この物語自体、ギリシャ神話からの翻訳であること、そしてこの物語の登場人物のエコーと

16 古代ローマ時代の詩人オウィディウスがラテン語で著した叙事詩形式で詠まれた古典作品。ギリシャ・ローマ神話の登場人物が動物や植物、星座や神などに変身していく物語群で15巻から成る。『変身物語』と呼ばれる。中世文学やシェイクスピアなど後世の文学へ多大な影響を与えた。

ナルキッソスの変身のストーリー¹⁷から、「ある言語のテキストを別の言語に翻訳するとはどういうことか、それを探るキーになるものが見つかった」とラヒリは感じた。

まず、ラヒリはエコーに翻訳家の本質を見る。翻訳する書籍に恋をし、ひたすら追いかけて親密な関係になり、原文を別言語に置き換える作業は、エコー（木霊）と同じ行為と見る。ラヒリはいう。

原作に対する見解があって、その上で自身の言語にふさわしい表現を整え、なお原作のエコーになろうとする。（ラヒリ, 2025, p. 65）

また、翻訳された作品は原作に対して「二次的」で、文学的に下位にあるものとは考えないと主張する。ナルキッソスが消えた後もエコーの声が響くように、翻訳されたものは持続可能と捉える。

翻訳とは、原文が聞こえるように、見えるように、ほかの言葉で映し出すものだからだ。

それは訳者によって可聴化、可視化されたはずである。じつは別物でありながら、本物が映っているように見えている。どっちがどっちかわからなくなれば、翻訳としては上出来だ。（ラヒリ, 2025, p. 67）

さらに、ラヒリは「翻訳とは変容である」とも捉えた。ラヒリ自身が作家から翻訳家に、そしてまた作家にと変身してきた。

このように、『変身物語』を英訳する中でラヒリは翻訳の本質について独自の考えを深めていく。では、その考察はラヒリの幼少期からの複数言語環境で成長したこととどのように関わるのだろうか。ラヒリは次のように述べる。

私は物心ついた頃からずっと、外界に耳を傾けて、人のすることに反響しようとしてきた。たしかに作家として本を書くことから出発したのだけれど、もともと異なる世界をつなぎたい意識が強かったのだから、翻訳家らしい気質に生まれついていたのだろう。ほかの言語、文化を自分に取り込もうと奮闘する人生になった。まずベンガル語を話す両親のもとに生まれ、大人になってからは創作のためにイタリア語と養子縁組をした。（ラヒリ, 2025, p. 69）

さらに、

移民するということは、よく観察して、ヒントになるものを模倣することである。おそらく完全な同化は無理だろう。また望ましくもない。どのケースも違うのであって、境界を

17 森の妖精であるエコーはおしゃべりが過ぎたため言葉をおうむ返しでしか話せなくなる罰を受ける。そのためエコーは美少年ナルキッソスに恋をするが声をかけられない。エコーを拒むナルキッソスは水に映ったわが身に恋をして水死する。エコーは憔悴するが声だけが残るという神話。エコーは木霊の語源となり、ナルキッソスはナルシスト、ナルシズムの語源となった。

越えた一人ずつが、その一人だけの曲折を経た上で、たとえば指紋のような個別のパターンができあがる。(ラヒリ, 2025, pp. 69-70)

このような自身の成長過程を踏まえ、翻訳について次のように言う。

翻訳とは——反復、変換、投影、再生を一挙に行なって——文学生産の中核にあるもので、それに付随するものではないという認識を新たにする。(ラヒリ, 2025, pp. 72-73)

さらに作家の創作活動についても述べている。

翻訳によって、さまざまな可能性の領域が開かれる。予想もしなかった道が見えて、作家の仕事に新しい方向性とインスピレーションをあたえる。変容させることさえあるかもしれない。翻訳とは、鏡をのぞいて、自分ではない姿が見えるようになるものだから。(ラヒリ, 2025, p. 73)

3. 4. グラムシの『獄中からの手紙』と翻訳論そしてアイデンティティ論

ラヒリは2021年に財団グラムシ研究所よりアントニオ・グラムシ¹⁸の書いた『獄中からの手紙』のイタリア語による決定版の刊行記念に講演を依頼される。ラヒリはその書籍等をイタリア語で読む中で、グラムシの理解を深めるとともに翻訳についても考察を深めることになった。

ラヒリはグラムシが獄中で複数の言語を学び研究や家族と複数言語でやりとりしていること、またグラムシの生い立ちや家系に関心と共感を寄せる。

グラムシはイタリアのサルデーニャ島¹⁹で生まれ、20歳までその島の言葉、サルデーニャ語で暮らした。若い時からイタリア語はもちろん、古代ギリシャ語、ラテン語の文学を読み、かつフランス語、ドイツ語、英語、サンスクリット語を学び、言語学や方言の研究もした。31歳の時、現在のロシアの都市(イヴォノヴォ)を訪ねた際、ロシア語通訳のジュリアに会い、翌年結婚する。ジュリアはロシア人の両親のもとに生まれたが、10代ではスイスとローマで過ごした経験があった。ラヒリは、グラムシにとって私生活、家族関係、将来において翻訳という行為が切っても切れないものになったと見る。

18 Antonio Gramsci (1891～1937)。イタリアのマルクス主義思想家。ムッソリーニのファシスト政権下で「政治犯」として逮捕され、投獄された。11年間の獄中生活で書かれた手紙やノートにより、後の政治学、歴史学、思想史やカルチュラル・スタディーズ等に多大な影響を与えた。中でも覇権を意味するヘゲモニー (hegemony) の概念を発展させた。

19 サルデーニャはイタリアのコルシカ島の南に位置する島。グラムシの母語はサルデーニャ語と思われるが、本人の手紙では「サルデーニャ人は半分だけ。純正ではない」と書いていた。

グラムシの家系も複雑である。父親はアルバニア系で、祖母はスペインの血を引く。ラヒリは、「(グラムシが) 自分のイタリア人意識は作られたものなのだと語る。どこかで移民、移動があって、イタリア人になった」と見る。そんなグラムシについてラヒリは、「私の見方を言うなら、厳密な意味でのルーツおよび言語を欠いていたところに、新しい言語への渴望が結びついて、翻訳家グラムシが形成され、そのまま翻訳家であり続けたのである。アイデンティティが重層構造になっていたことで、似たような人間と関わりたくなる気持ちも出たのだろう」という(ラヒリ, 2025, p. 125)。

グラムシは獄中で外国語の辞書や文法書を差し入れてもらい、ドイツ語やロシア語の学習を続けた。他に、英語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語も独学した。妻ジュリアとの間に二人の息子がいた。二人はモスクワで生まれ、ロシア語で育った。息子から父への手紙はロシア語だったため、グラムシは二人の息子にロシア語で書いた手紙を送った。

グラムシは自身の母親への手紙はサルデーニャ語で綴った。「サルデーニャ語はロマンス語の一つで、非古典ラテン語と密接に関係し、アラビア語、ビザンチン・ギリシャ語、リグリア語、カタルーニャ語、スペイン語からの影響が混在する。この言語があって、グラムシは母親に、また先祖に、結びついている。」とラヒリは説明する(ラヒリ, 2025, p. 136)。

獄中期間も含めたグラムシの言語生活には多様な言語が使用・学習されていること、そしてその言語間で常に「翻訳」が行われていたことから、「グラムシの生涯を通じて、トランスレーションとは、現実でも、願望でも、修練でもあって、人生の錨、象徴にもなっていた」(ラヒリ, 2025, p. 122)とし、グラムシの生活に翻訳が欠かせないものだったと、ラヒリは見る。したがって、グラムシの翻訳行為は、文化、歴史、哲学、政治、また感情とも結びついており、彼の政治思想においても翻訳の概念が中心的な位置を占めているという。

ラヒリは、グラムシを読みながら、もう一つの大きな視点を得た。

グラムシの資料に、「政治犯」としてグラムシの「身柄を移す」という文脈で“traduzione”(翻訳・移送)というイタリア語が使用されていることに気づく。そこから関連するイタリア語彙の探索が始まる。

ラヒリは「翻訳・移動・移転」の意味のイタリア語の *traslazione* を考える。この語は、「移送、移植」を意味するラテン語の名詞, *tranlatio* から発していて、英語の *translation* はこの語に近いと考える。

イタリア語の辞書を見ると、この *traslazione* には15の定義があった。「あるものを別の場所へ

「移動、移転」させる」, 「人間の移動」, 「あるテキストを別の言語に移す」, 法律の「改正」, 水晶の「生成」, 幾何学の「変換」, 波形の「動態」, 精神分析で分析家と患者の間の「転移」, 修辞法の「比喩」, 訴追の「変更」, 「移植や接ぎ木」, 「筆写」, 「転生」, 「生から死への通過」まである(ラヒリ, 2025, p. 149)。

ラヒリはグラムシをイタリア語で読むことが, 「私を変容させた」という。「翻訳が, 意味の再創造, 活性化, 近似化に関わる」ともいう(ラヒリ, 2025, p. 150)。

グラムシの手紙とノートを読む中で, ラヒリは自身の言語観をも更新する。

私自身は, いわゆる「母語」なるものに, いつも葛藤を覚える。(中略)「言語」が複数形(“lingue [リングエ]”)になると, いくらか落ち着いていられる。のびやかな関係のネットワークがあるように思うのだ。(中略)言語とは, その単数ではなく複数において, 誰の原点にもなるのだと私は思う。(ラヒリ, 2025, p. 159)

そしてラヒリは, 言語に対する思いも綴る。

私たちに複数の言語があつてこそ, 自己表現も自己認識も可能になる。無数に広がる自己の内部へと導かれる。その空間と静寂に——。もはや国ごとの別もなく, 垣根や境目のない海の深みに——。(ラヒリ, 2025, p. 160)

ラヒリはオウィディウスの『変身物語』やグラムシの『獄中からの手紙』などをイタリア語で読みながら, 「翻訳者は等価になるものを模索しつつ, どの言語も違っている以上は, まったくの等価はあり得ない」と翻訳の意味を解釈する。加えて, 複数言語を使用して生きる人の「移動／移転／変更／接ぎ木」の生き方に注目し, 「アイデンティティが再形成・再定義される境界領域にだけ, 意味があるように思えた。」と語る(ラヒリ, 2025, p. 176)。

ラヒリは, 本書の最後に, 翻訳論だけではなく, ラヒリ自身のアイデンティティのあり様についても語っていると見ることができよう。

4. 考察

以上のように, ラヒリの創作活動の背景には彼女の幼少期からの複数言語環境, 移動とことばの記憶が深く関わっている。では, 単数言語環境で成長する子どもの場合と異なり, 複数言語環境で成長する子ども場合の経験と記憶がどのように創作活動につながっているのかを, ラヒリのケースを例に考えてみよう。

これまでのラヒリ研究では幼少期からの複数言語環境、移動とことばの記憶の点からの考察はほとんど見られない。例えば、ラヒリの『翻訳する私』(2025)の原書がアメリカで2022年に出版された直後に出た書評(Lewis, 2022)も、邦訳された本書の書評(青山, 2025; 鴻巣, 2025)も、本書の主題が「翻訳論」であり、ラヒリが三言語を使って生きてきたことから生まれた独自の考察であると論じる点で共通している。その独自性とは、「翻訳者の不可視性」への疑問や否定、原典と翻訳されたものの間の「翻訳等価性」、「変容こそ翻訳の本質」と主張する点を意味する。本書の訳者である小川高義が、それらの点を踏まえた上で、次のように指摘する点は注目される。

原題の Translating Myself は、「自分を変容させる」ことでもあろう。「わたしが私を、移す／変える」とでも言えそうな、自己の別バージョンを見ている意識が明らかだ。
(中略) この一冊は、ラヒリが翻訳について論じながら、同時に（あるいは、それ以上に）自分がどう生きてきたか、自分をどう思っているかと語っている本なのだ。(小川, 2025, p. 186)

これらの評者たちが指摘するように、本書はラヒリの「翻訳論」であり、その独自の考察は彼女の人生と密接に関係していることは確かであろう。しかし、本書には「一人の人間の内に降り積もった時間と思索が見事に結晶する」(青山, 2025)とか、「異言語とかかわる者は永遠の客人であり、本書は三言語の間にたゆたう作家」の孤独や感覚、痛みを読者に届ける(鴻巣, 2025)とか、「そもそも母語なるものは何なのかという疑義を呈する人」(小川, 2025)と説明するだけでは、ラヒリの翻訳論が彼女の幼少期からの経験とどう関わり、どのような言語生活からその翻訳論が生まれてくるのかはわからない。彼女の作家活動の中心は英語、イタリア語の言語間の移動／転換／翻訳に見えるが、彼女の中に何が起きているのかへの探究は十分にされていない。

ここでは、2. 3. で述べた4つの視点から、ラヒリの翻訳論の内実を読み解いてみよう。

①音の切り出し

ラヒリはロンドンでベンガル語を家庭内言語とする両親のもとで生まれた。胎児のときからベンガル語の音を聞き、さらに幼少期にロンドンでの「イギリス英語」環境からアメリカ東部の「アメリカ英語」環境へ移動した。さらに、子ども時代に親に連れられて親の故郷のインド・コルカタ(旧カルカッタ)へ移動、滞在した経験がある。その町ではベンガル語以外にもインド英語、ヒン

ディー語、ウルドゥー語など様々な言語が使用されている²⁰。それだけではなく、宗教や生活習慣の異なる背景を持つ多様な人々の生活音に溢れている。ベンガル湾からくるモンスーンにより高温多湿の気候で、そのためロンドンやアメリカ東部とは異なる雨の音や風の音を聞いただろう。この時の耳慣れない言葉や音の体験、気温や湿度、食物の味や匂い、見慣れない宗教儀礼や風習、衣装など、嗅覚、味覚、触覚、視覚から受ける強い刺激にさらされたことが子どもの音の認識と音の切り出しに直結していく。

このコルカタの滞在が「あとで作家となる原点があった」(小川, 2000, p. 264)と語るほど、インドは彼女の人生にとって重要な場所だった。同時に、ロンドンからアメリカ東部へ、そしてインドへの移動の経験により、相対的視点を体得することも見逃せない点であろう。

②意味の境界の探索

音の切り出しは、単数言語環境より複数言語環境で成長する子どもにとって負担が多くなる。自分の意図とは別に、移動によってもたらされる環境変化から、誰がどのような意図でその言葉・音を使っているのか、その言葉・音の意味と使用範囲を、子どもは独力で認識しなければならない。つまり、子どもは複数言語環境で常にそれぞれの言語の「言語固有の意味の境界」を自分で発見し、かつ更新していかなければならない²¹。さらに難しいのは、大人の外国語学習者と異なり、子どもは身の周りの言語の全体像をまだ把握も習得もできていない段階で、同じ意味を他の言語の音で理解する作業を日々行わなければならない、日常的に異なる言語間において移動を繰り返し、それぞれの言語「固有の意味の境界」を探索する行為を継続的に経験しているのである。つまり子どもは自分なりに「翻訳作業」を行う、あるいは「翻訳作業」を行わなければ生きていけないのだ。ラヒリが「私は物心ついてからずっと翻訳について考えて生きてきた人間だと言いたい」(ラヒリ, 2025, p. 10)と述べるのは複数言語環境で成長する子どもとして必至の結果だったと考えられる。そして、その作業は動的で、創造的営為であり、次の推論にもつながる重要な営為である。

③記憶

子どもが音の切り出しから単語の意味を自分で考えるエンジンは推論である。この推論は自

20 デビュー作品の短編小説「病気の通訳」(ラヒリ, 1999/2000)では、グジャラート語を話す男性が通訳として登場する。

21 ラヒリは作家になった後の創作活動においても「母は題材にもインスピレーションにもなってくれた」(ラヒリ, 2025, p. 10)という。幼少期からのラヒリの言語習得において養育者としての母の存在は大きかったと思われるが、その詳細は不明である。

然な思考で、生存に欠かせない創造的推論とも言われる（今井，秋田，2023，p. 246）。そして、その創造的推論は生きていく上で必要となる推論であると同時に、子どもの想像力，創造力を刺激し，物語世界に誘う²²。

推論によって得られた意味づけは動的で，多様に変化する。推論の結果が記憶に残り，エピソード記憶となる場合がある。ラヒリが幼稚園で経験した「母はママではなく，ベンガル語のマーなのだ」というエピソード記憶は具体的／イメージ的思考だが，その記憶をラヒリは身体性を離れた抽象的思考（意味記憶）として「翻訳のジレンマの記憶」と呼び，抽象化し，独自の翻訳論へ発展させた。ベンガル語の短編を母親に音読してもらった大学院時代の経験の記憶は，ラヒリに「私は，もっと昔から，およそ読むことができるようになる以前から，翻訳をしていたと言えるのだ」（ラヒリ，2025，p. 11）と幼少期の記憶を呼び起こす。それは，「暮らしの中には，英語とベンガル語が同時に存在した。それを自分のために，人のために，いつも相互に通じさせようとしていた（ラヒリ，2025，p.11）と語るように，記憶が生き方と重なって解釈されていく。

「生存に欠かせない創造的推論」はラヒリの創作活動にも発揮されているだろう。ただし，彼女はイタリア語で書こうとすると「つらい思いをした過去がよみがえる。二つの世界の間。どっちからも外側の，孤独感，疎外感。」（ラヒリ，2025，pp. 23-24）と述べるように，複数言語環境で育った子どもの翻訳行為には「つらい思い」の記憶も含まれており，その記憶が大人になっても続き，生きることと密接につながっていくことにも留意が必要であろう。単数言語環境で言語習得をする子どもには，このような意味の翻訳行為は見られないだろう。

さらに言えば，前述のように，記憶は幼少期の言語習得における「記号接地」においても思考の発達においても重要な要素であり，絶えず上書きされ意味の境界が更新されていく。一方，過去の出来事についての記憶の意味づけは過去を振り返る時点で更新され，身体に，そして自らの生き方において意味が更新されていく。つまり，記憶が自分にとってどのような意味があるのかと自問することで記憶の「記号接地」が繰り返されていくのである。

④脳－身体－環境の動的関係性と，移動とことば

英国と米国とインドの間の移動経験は成長期のラヒリの脳，身体の発達に大きく影響したと考えられる。それぞれの生活空間で感じられる言語音や生活音，気候，人々の異なる表情や態度，食を含む生活様式など，ラヒリは，五感から種々雑多な刺激を身体に受けただろう。その脳

22 幼少期からの「移動とことば」の経験と記憶が文学的創作に影響したと考えられる例として，ラヒリの他にケン・リュウ，サルバドル・プラセンシア，温又柔，荻野アンナがある（川上，2021）。

—身体—環境の間の動的な相互作用の中で、ラヒリは大人やコミュニティが世界をどう見ているかという「世界を切り分ける方法」を学ぶ体験を積みながら、その環境に相応しい「適応的行動」を模索する。その中で、複数言語で考える力、生活世界を読み解く力、さらに変化する環境に対応する力が鍛えられていく。その結果、脳の動きが活発化し、「感覚・知覚・推論・記憶」が更新されながら、子どもの脳を含む身体の中で言語と知識の習得が同時に進んでいく。その過程で、子どもは複数の記号システムに関わりながら、その記号システムを洗練していく。

ただし、ラヒリの心象には前述のような不安定感、孤独感、疎外感、浮遊感²³が見られた。本書では「二つに割れた言語世界」に生まれたという自意識（ラヒリ, 2025, p. 10）, 「私は本当の意味で母語がない」, 「言語的には孤児である感覚, とも言えるだろう」（ラヒリ, 2025, p. 19）とラヒリは述べる。またイタリア語のエッセイ集『べつの言葉で』では、次のようにいう。「わたしの母語であるベンガル語は、アメリカでは外国語だ。自分の言語が外国語と見なされている国に住んでいると、絶えず疎外感を味わう可能性がある。」「もう一つの分裂がある。わたしはベンガル語を完全には知らない。読めないし、書くこともできない。なまりがあって自信なさそうに話すので、いつも自分とベンガル語の間にずれを感じる。だから、矛盾するようだが、わたしの母語は外国語でもあると考えている。」（ラヒリ, 2015, pp. 17-18）。この点も、単数言語環境で成長する子どもの言語習得過程では見られない点であろう。

むしろラヒリの場合、このような不安定感、孤独感、疎外感、浮遊感があるからこそ、イタリア語を学び、その過程で独自の翻訳論を発展させたとも言えるのではないか。彼女の翻訳論には二つの柱がある。一つは、原典と翻訳書の間の格差はないということであり、翻訳作業は創造的営為であるという考えである。その考えは、子ども時代から翻訳家であったと自認し、これまで複数言語間で生きてきた自身を肯定的に捉える視点でもある。もう一つは「翻訳」の含意する「移動／移転／変更／接ぎ木」の考え方である。空間移動だけではなく、イタリア語を含む言語間移動の経験と記憶から言語の複数性に落ち着きを得、移り行くことに価値を見出し、移動にともなう境界領域にこそ人のありようがあると主張しているように見える。つまり、これらの二点はどちらもラヒリ自身の自己肯定感であり、翻訳行為の正統的評価でもある。

本書の「序文」と「あとがき」にラヒリは自身の母親のことを書いている。ベンガル語を話す母

23 鴻巣（2025）はラヒリを評して「三言語の間にたゆたう作家」と述べた。私はかつて、荻野アンの芥川賞受賞作品にある「わたしは同時に母の体内でたゆたう胎児であり、棺桶の闇で腐敗していく死体であった」という表現に複数言語に触れて成長した作者の「自己の存在についての不安定感と浮遊感」と論じた（川上, 2022）。

親はラヒリの作家人生において極めて大きい役割を果たしたという。その高齢の母親の死に立会い、「母は死ぬというより別のものに変わるのだ」と思い続けた。複数言語環境で一緒に暮らしてきた母親の死も「翻訳」の含意の「移動」と重ねている²⁴。

最後に本書のタイトルについて考えてみたい。本書の訳者である小川（2025）は「原題の *Translating Myself* は、「自分を変容させる」ことでもあろう。「わたしが私を、移す／変える」とでも言えそうな、自己の別ヴァージョンを見ている意識が明らかだ」と述べている。ただし、原題は “*Translating Myself and Others*” である。この others は本書に出てくるスタルノーネ、オウイディウス、グラムシであろうか。「自分を／他者を変容させる」か。Translating を修飾句と見れば、「移る／変わる私、移る／変わる他者」となろうか。複数言語環境で生きる人々の「移動とことば」の生のあり様と動態性を示唆しているとも考えられよう。

以上でジュンパ・ラヒリの『翻訳する私』をめぐる考察を終える。本稿で試みた「ラヒリを読み解く視点」は今後ラヒリの人と作品を論じる場合に有効な視点を提供することになるだろう。同時に、本書は複数言語環境で成長する子どもの経験と記憶を焦点化する「移動する子ども」学（川上、2021）の主題と重なる書であることも確かであろう。最後に、本稿の考察が「移動する子ども」研究へ繋がる点を、覚書として提示する。

第1に、幼少期より複数言語環境で成長する子どもは、脳－身体－環境の動的関係性の中で五感から多様な刺激を受けながら複線的言語習得過程を経験する。

第2に、その複線的言語習得過程において、子どもは異なる意味の境界を多くの試行錯誤と推論を経て体得し、言語と記憶の「記号接地」を経て言語という巨大な記号システムと意味の体系を独自に構築していく。

第3に、その構築過程に見られる営為は基本的に「翻訳作業」であり、主体的で動態的で、創造的営為であると同時に、記憶の貯蔵がともなう営為である。

第4に、その記憶はエピソード記憶、意味記憶と抽象化されながらも、ポジティブにもネガティブにも意味づけられ、記憶の消去と上書きが繰り返され、成長する子ども自身のアイデンティティと生

24 本書に父親のことは触れられていない。本書の扉に「追悼 タバティ・ラヒリ（一九三九－二〇二一）詩人、翻訳家、母／マー」とある。ラヒリのジェンダー観の検討は今後の課題である。短編集『停電の夜に』（1999/2000）の一篇「三度目で最後の大陸」はラヒリの父親をモデルにしたようなベンガル人男性がインドから英国留学を経て、アメリカの大学の図書館職員になる人生を一人称語りのストーリーとして展開している。『見知らぬ場所』（2008/2008）にもインド・コルカタ出身でアメリカに暮らす「父」が登場する。

き方に重なっていく。

第5に、複数言語環境で成長する子どものアイデンティティと生き方は子ども独自の人生軌跡を形づけ、独自の想像力と創造力を発達させ、自己表現・創作活動へ発展する。例えば、当事者独自の文学、音楽、美術、ファッションなど多くの表現活動に昇華する。

本稿で検討したジュンパ・ラヒリの『翻訳する私』は、これらの諸点を示唆する貴重な好例と言えるのではないか。

文献

青山七恵 (2025, 6月21日). 外国語と向き合う ― 思索の結晶 [書評: ジュンパ・ラヒリ『翻訳する私』] 『朝日新聞』朝刊.

今井むつみ (2010). 『ことばと思考』岩波新書.

今井むつみ (2013). 『ことばの発達の謎をと解く』ちくまプリマー新書.

今井むつみ (2020). 『親子で育てることば力と思考力』筑摩書房.

今井むつみ, 秋田喜美 (2023). 『言語の本質 ― ことばはどう生まれ、進化したか』中公新書.

今井むつみ, 佐治伸郎 (編) (2014). 『言語と身体性』岩波書店.

今井むつみ, 佐治伸郎 (2023). 言語習得研究のこれまでとこれから『認知科学』30(1), 63-73.

<https://doi.org/10.11225/cs.2022.076>

今井むつみ, 針生悦子 (2014). 『言葉をおぼえるしくみ ― 母語から外国語まで』ちくま学芸文庫.

小川高義 (2000). 訳者あとがき. J. ラヒリ『停電の夜に』(小川高義, 訳; pp. 261-267) 新潮社.

小川高義 (2001). 文化の通訳 ― ジュンパ・ラヒリ『停電の夜に』をめぐる『横浜市立大学論叢人文科学系列』52, 1-2, 73-88. <https://doi.org/10.15015/0002001861>

小川高義 (2025). 訳者あとがき. J. ラヒリ『翻訳する私』(小川高義, 訳; pp. 185-189) 新潮社.

川上郁雄 (2021). 『「移動する子ども」学』くろしお出版.

川上郁雄 (2022). 「移動する子ども」と文学 ― 荻野アンナの文学世界を読む. 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子 (編) 『移動とことば 2』(pp. 219-250) くろしお出版.

川上郁雄 (2023). 情動の視点から見る「移動する子ども」学『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』14, 66-80. <http://hdl.handle.net/2065/0002000760>

川上郁雄 (2024). 記号接地問題と「移動する子ども」学『ジャーナル「移動する子どもたち」 ― ことばの教育を創発する』15, 56-79. <http://hdl.handle.net/2065/0002004500>

- 鴻巣友季子 (2025, 5月24日). トランスレーションのかなたの世界 [書評: ジュンパ・ラヒリ『翻訳する私』] 『毎日新聞』朝刊.
- 米盛裕二 (2024). 『アブダクション—— 仮説と発見の論理』(新装版) 勁草書房.
- ライダ, J. (2009). ジュンパ・ラヒリは「移民作家」か『ソフィア—— 西洋文化ならびに東西文化交流の研究』58-4, 81-101.
- ラヒリ, J. (2000). 『停電の夜に』(小川高義, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (1999). *Interpreter of Maladies*. Houghton Mifflin Harcourt.)
- ラヒリ, J. (2004). 『その名にちなんで』(小川高義, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2003). *The Namesake*. Houghton Mifflin Harcourt.)
- ラヒリ, J. (2008). 『見知らぬ場所』(小川高義, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2008). *Unaccustomed Earth*. Knopf.)
- ラヒリ, J. (2014). 『低地』(小川高義, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2013). *The lowland*. Knopf.)
- ラヒリ, J. (2015). 『べつの言葉で』(中嶋浩郎, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2015). *In alter parole*. Guanda.)
- ラヒリ, J. (2019). 『わたしのいるところ』(中嶋浩郎, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2018). *Dove mi trovo*. Guanda.)
- ラヒリ, J. (2025). 『翻訳する私』(小川高義, 訳) 新潮社. (Lahiri, J. (2022). *Translating myself and others*. Princeton University Press.)
- Arima, H. (2015). The awakening of a second generation protagonist to diaspora identity in Jhumpa Lahiri's "Unaccustomed Earth" 『恵泉女学園大学紀要』 27, 149-173. <https://keisen.repo.nii.ac.jp/records/869>
- Chatterjee, N. (2022). *Reading Jhumpa Lahiri: Women, domesticity and the Indian American diaspora*. Routledge.
- Harnad, S. (1990). The symbol grounding problem. *Physica D: Nonlinear Phenomena*, 42(1-3), 335-346. [https://doi.org/10.1016/0167-2789\(90\)90087-6](https://doi.org/10.1016/0167-2789(90)90087-6)
- Lewis, T. (2022, June 15). The air we breathe [Review of the book *Translating myself and others*, by J. Lahiri]. *Boston's Premier Online Arts Magazine*. <https://artsfuse.org/257979/>
- Munos, D. (2013). *After melancholia: A reappraisal of second-generation diasporic subjectivity in the work of Jhumpa Lahiri*. Rodopi. <https://doi.org/10.1163/9789401209915>